



Title	定時制高校生徒の労働と学習
Author(s)	石井, 茂
Citation	北海道大學教育學部紀要, 3, 97-102
Issue Date	1955-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28979
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P97-102.pdf



高等學校の教育問題に関する調査資料

ここに集録した資料は石井茂以外のものは昭和29年度の卒業論文であり、特に高等学校の教育に関して調査した資料だけを論文中より抜粋したものである。

定時制高校生徒の労働と学習

—— 炭鉱地域の定時制高校調査を中心として ——

石 井 茂

一 目 的

教育の機会均等という立場から勤労青年を主体として設けられた定時制高等学校は多くの問題をもっている。いうまでもなく働らきつつ学ぶものにとつては経済的、時間的、肉体的な諸制約のもとに学習を余儀なくされていることは周知の事実である。定時制高等学校の教育としては、このような諸制約のもとにある生徒の学習をして効果あらしめることが重要な課題である。

本発表は、定時制高等生徒の生活、特に、その労働と学習との関連において、

Ⅰ 生徒は労働と学習を如何に一体化せしめているか

Ⅱ 生活背景を異にする全日、定時の生徒を比較してその学力にどんな相違がみられるかを調査し、定時制高校教育を再検討すべき資に供しようとするものである。

特に開発途上にある本道では、定時制高等学校は、地域の産業開発を促進する人材の養成を目標とすべきものであるから、この研究を手掛りとして、本道における定時制高等学校の在り方を如何にするかという、究極の目的に進まうとするものである。

二 調 査 対 象

以上の目的のもとに調査地域として、

(1) 産業地域類別により鉱山地域を設定した。

(2) 鉱山地域のうち炭鉱地域を選定した。

その理由として、a) 炭鉱業は本道の基幹産業であること、しかも、b) 炭鉱地域の定時制高校には、炭鉱の労働或いは組（炭鉱の下請小会社）のもとで、その労働に従事する勤労青年（所謂潜在失業者）が学んでいるので教養、技術の向上や生産人としての生活能力、生産技術を修得させる必要があると考えられる。

以上のような地域選定の理由によつて炭鉱地域に所在するA高校を対象とした。同校の定時制に

において生活調査と学力調査を、全日制においては学力調査を実施した。

三 調査結果について

次に調査結果の概要について述べることにする。

Ⅰ 生徒はどのような生活状況のもとで学習しているか

1. 生活状況について

1) 生徒の職業

調査人員 260 人のうち、定まつた職をもっているとするものが 167 人、きまつた職をもっていないとするもの 86 人、その他 6 人である。定まつた職業をもっているとするものの内訳はつぎのようになっている。(1表) これによると単純労働者 (21%), 事務的従業者 (18%), 特殊技能工 (15%), 採鉱採石単純労働者 (13%) の順で炭鉱業に関連する職業従事者とみなされるものが 49% を占めている。家計との関連についてみると家計の中心者 (17%), 補助者 62%, その他 21% で (自己の消費に資するもの) その収入を家計に入れているものは 79% に及んでいる。

つぎに職業に従事しているものの学習と関連をもつ労働時間、読書勉強時間、睡眠時間についてみると次のようになっている。

1表 生徒の職業

単純労働者	35 (20.9)
事務的従業者	30 (17.9)
特殊技能工	25 (14.9)
採鉱採石単純労働者	21 (12.6)
販売従業者	17 (10.2)
運輸的職業	4 (2.4)
サービス職業	4 (2.4)
分類不能	2 (1.2)
農夫	1 (0.6)
専門的職業	1 (0.6)
不詳	27 (16.2)
計	167

2表 労働時間

7 時間未満	7 (4.2)
7 ~ 8 時間未満	25 (15.0)
8 ~ 9 "	110 (65.8)
9 ~ 10 "	11 (6.6)
10 時間以上	3 (1.8)
不記	11 (6.6)
計	167

3表 読書勉強時間

1 時間未満	7 (4.2)
1 ~ 2 時間未満	43 (25.7)
2 ~ 3 "	32 (19.2)
3 ~ 4 "	17 (10.2)
4 時間以上	5 (3.0)
不記	63 (35.7)
計	260

a) 労働時間

8 ~ 9 時間未満 (66%) が最も多く、ついで 7 ~ 8 時間未満 (15%) のものが多い。(2表) 9 時間以上の労働に従事するものが 11.4% もあることは注目される。

b) 読書勉強時間

1 ~ 2 時間未満 (26%) の読書勉強時間をもつものが多く、ついで 2 ~ 3 時間未満 (19%) となつている。(3表)

c) 睡眠時間

7 ~ 8 時間未満 (36%), 8 ~ 9 時間未満 (33%) のものが多い。7 時間未満のもの

4表 睡眠時間

6 時間未満	7 (4.2)
6 ~ 7 時間未満	33 (19.8)
7 ~ 8 "	60 (35.9)
8 ~ 9 "	55 (32.9)
9 時間以上	10 (6.0)
不記	2 (1.2)
計	167

5表 就学の目的

教養技術の向上	140 (53.9)
進学のため	23 (8.8)
高校を出ないと社会的にみとめられない	26 (10.0)
職場での待遇地位の向上	8 (3.1)
職業転換のため	10 (3.8)
その他	25 (9.6)
不記	28 (10.8)
計	260

のが 4.2% あることは注目される。(4表) 以上のことから読書勉強時間は 1 ~ 2 時間程度のもの

が多い。このような状況にある生徒には、教科の予習復習は欠くことの出来ないものとなるわけであるが、その状態はどのようになっているだろうか。

2) 学習について

a) 就学 の 目 的

先ずどのような目的で就学しているかについてみると教養技術の向上が最も多く (54%), ついで高校を出ないと云々するもの 10%, その他 10% となつている。(5表)

b) 学 習 の 実 態

このような目的で就学しているのであるが、その学習の状態は次のようになつている。

I) 6表に示されているように毎日するというものはわずか 19%で、大半は時々する (55%) という状態である。

II) 予習復習をいつやるか

その学習はいつ行われているであろうか。7表でわかるように大部分は下校後するもの (15%) が多いがなお職場の休憩 (15%), 学校の始業前を利用しているものがかなり多いことは注目される。

III) ど ん な 科 目

その学習されている科目は英語、数学が多く、ついで国語、社会が予習復習されている。(8表)

8表 科 目		9表 予習復習の時間		10表 予習復習の困難		11表 疲労の合度 (翌朝)	
科 目	延数	30 分 未 満		時間不足		回復する	
英 語	92	30分~1.00未満	(1.9) 31 (11.9)	睡眠不足	25 (9.6)	やや残る	63 (24.3)
数 学	88	1.00~1.30 "	34 (13.1)	疲労空腹	41 (15.8)		133 (51.2)
国 語	45	1.30~2.00 "	7 (2.7)	理解困難	21 (18.1)	回復しない	30 (11.5)
社 会	37	2.00~2.30 "	54 (20.8)	そ の 他	16 (6.1)	わからない	33 (12.7)
理 科	17	3.00~4.00 "	32 (12.3)	な し	13 (15.0)	不 記	1 (0.4)
商 業	10	4.00 以 上	20 (7.7)	不 記	144 (55.4)	計	260
保 健	2	不 記	77 (29.6)	計	260		
家 庭	1						
科目の不定	26	計	260				

IV) どの位するか

9表でわかるように2時間~2.5時間のものが21%で最も多く、ついで1時間~1.5時間の13%, 3時間~4時間, 30分~1時間未満の12%となつている。

以上のことからその予習復習の困難がうかがわれるわけであるが、その困難について次のようなことがあげられている。

V) 予習復習の困難

睡眠不足、疲労、空腹 (16%), 時間不足 (10%), 理解困難 (8%) 等であり、その学習が

如何に労働や生活からの疲労や時間不足等によつて困難をきたしているかがわかるのである。このような制約は学習面のみならず身体的方面にも影響を与えていると思われる。

3) 身体的状況

a) 疲労の度合

翌朝疲労が回復するか、しないか問うてみると 11 表のように、疲労が残るというものが 51 %, 回復するというもの 24 %, 回復しないというものが 12 % となつている。

12表 視力(入学後)	
弱らない	58 (22.3)
弱った	151 (58.1)
わからない	44 (16.9)
不記	7 (2.7)
計	260

13表 身体(入学後)	
丈夫になつた	19 (7.3)
普通	137 (52.7)
弱くなつた	70 (26.9)
わからない	29 (11.2)
不記	5 (1.9)
計	260

14表 勉学継続上の困難	
時間不足	35 (13.5)
睡眠不足, 疲労	36 (13.8)
生活との両立難	18 (6.9)
学力不足	14 (5.4)
健康保持難	9 (3.5)
職場の無理解	4 (1.5)
その他	8 (3.4)
不記	136 (52.3)
計	260

15表 退学の理由	
病気の都合	18
職場の都合	13
家庭事情	4
本人の事情(怠情)	5

16表 休学の理由	
病気の都合	29
職場の都合	19
経済的	1
家庭の事情	1
本人の事情(怠情)	1

17表 中退の理由	
病気の都合	10
職場の都合	19
生活の事情	14
本人の怠情	7
健康上	3
その他	7

b) 視力(入学後)

入学後視力は弱つたか、どうか問うてみると、弱らないというものの 22 %, わからないというものの 17 % に対して、弱つたというものは 58 % に及んでいる。(12 表)

c) 身体(入学後)

入学後の身体状況について問うてみると 13 表に示されているように、弱くなつたというものが 27 %, わからないというもの 11 % になつている。労働からの身体的影響、学習からくる影響について科学的に究明する必要がある。以上によつて、労働に従事しながら勉学するものは勿論のことであるが、職をもたないものにとつても困難であることが知られる。その勉学継続上の困難としてあげられているものは、つぎのようになつている。(14 表)

時間不足 14 %, 睡眠不足, 疲労 14 %, 生活との両立難 7 %, 学力不足 5 % 等で、こうした事情は更に 15 表, 16 表, 17 表によつてもうかがわれる。即ち級友の退学, 中退, 休学はどのような理由によるかに対しての回答は同様なものをよせている。

II 学力について

このように生活との両立になやみながら、その両立に努力しつつ学習している生徒の学力はどの程度になつているであろうか。さきに実施された日本教育学会の作成による、義務教育修了者の学

力がどの程度に付与されているかをみるための、所謂基礎学力テストの問題のうち国語、社会、理科の四科目の各々について、最も正答率の不良なものを選びテストしたところ次のような結果が得ら

18表 科目別、学年別、正答率

科目	鉾山地域 A校定時制														
	平均			一 学 年			二 学 年			三 学 年			四 学 年		
	総平均	男	女	平均	男	女	平均	男	女	平均	男	女	平均	男	女
国 語	37.5	35.5	39.3	35.2	33.3	40.0	25.0	23.3	30.0	41.1	44.8	20.0	48.2	42.8	62.5
社 会	36.9	38.5	31.6	30.8	29.8	33.3	31.2	31.6	29.7	38.3	40.2	26.6	46.9	55.6	36.4
数 学	16.0	16.6	18.6	7.3	5.1	12.5	4.5	4.9	3.3	21.7	23.2	13.3	35.5	37.2	31.2
理 科	9.0	9.4	8.0	8.8	8.3	10.0	3.7	4.4	1.6	11.2	13.1	0	14.3	12.6	7.5

19表 科目別、学年別、正答率

科目	都 市 A校定時制														
	平均			一 学 年			二 学 年			三 学 年			四 学 年		
	総平均	男	女	平均	男	女	平均	男	女	平均	男	女	平均	男	女
国 語	44.5	46.4	40.8	37.0	39.0	34.0	43.9	43.1	44.7	43.5	45.1	37.5	56.4	58.9	50.0
社 会	42.1	45.5	35.8	39.5	42.6	35.0	36.4	37.3	35.3	49.0	50.9	41.9	45.0	49.4	33.7
数 学	33.7	37.0	27.6	37.5	37.9	37.0	26.8	29.8	23.3	34.7	36.4	28.5	34.7	42.3	15.5
理 科	19.0	21.9	13.7	20.8	24.2	15.9	15.8	21.5	9.2	16.0	16.9	12.5	23.0	25.0	18.1

れた。(18表)〔同時期に都市におけるS校についても実施した。その結果が16表である。これら両地域の学校別課程別の正答率、誤答率、無答率を示したのが20表である。〕18表に示されているように全般的に学力の十分でないことが知られる。特に数学、理科において甚だしいようである。しかし、学年が進むに従って各教科とも高くなっている。男子と女子とでは科目によつて差がみられる。即ち男子は社会、理科において高く、女子は国語、数学において高くなっているが、上学年になるにつれて都市の場合と同様に男子が高くなる傾向がみられる。

20表 学校別、課程別、正答率、誤答率、無答率

校名課程		正答率	誤答率	無答率	
都市 S 校	定時制	平均	36.73	56.78	6.49
		男	39.9	54.8	5.3
		女	30.4	60.7	8.9
	全日制	平均	52.99	45.08	1.93
		男	57.7	40.9	1.4
		女	44.1	53.0	2.9
鉾山地域 A 校	定時制	平均	29.18	62.43	8.39
		男	29.7	60.1	10.2
		女	24.0	65.2	10.8
	全日制	平均	40.29	56.70	3.01
		男	43.7	54.3	2.0
		女	34.2	60.7	5.1

都市S校の定時制との比較においては、都市よりも低いことを示している。

全日制との比較においては、正答率は低く、誤答率、無答率は高くなっている。(20表)都市のS校においても同様の傾向を示している。誤答率が教えられたことを誤つて習得していることを示し、無答率が未学習の結果を意味するとするならばこうした傾向は大いに注目されなければならない問題であろう。

四 結 語

以上、生徒はどのような生活状況のもとで学習しているか、その学習の実態や学力はどのようになっているかについてみてきたのであるが、生徒たちにとって働くことと、学ぶことの両立が如何に困難なものであるか、勉学を継続するためには何よりも健康保持ということが重要であることを示している。従つて、運動と休養、給食と栄養、照明等の関連的な研究とその健康管理と指導が重要なものとして提起されるであろう。

全日制に比べて、誤答率や無答率が高く、教えられたことが誤つて習得していることや未学習の結果と思われる傾向がみられる。更にこうした傾向は、将来もなお、生徒の学習の実態から予想されるところであり、学習指導について考慮する必要がある。又学習を効果あらしめるためには、生活過程や労働過程によつて得られた経験と知識を活かし、それを深めるような教科編成も考慮する必要もあろう。

定 時 制 高 校 生 徒 の 生 活 と 体 育

片 山 普 次

序 言

戦後民主教育が叫ばれ学校教育が重要視されて来た。定時制課程において学ぶ学徒も年々増加を辿っているが、彼等はその生活が家庭的、経済的に不偶で努力型の苦学力行の者が多い。このような者はしばしばその生活環境と不調和になることがある。彼等の身心を共に健全に発達させるためにはよき環境と共に充分なる教育がなされなければならない。そこで彼等と最も密接な関係を持つ問題と身心の発達に貢献する体育について調査をして見た。

I 年 代 層

勤労学徒という我々は何か彼等の年令がずつと多い特異なものという感を抱くが、実際は彼等の年代層は範囲は広いが、全日制と同様の年代(15才～20才位)の未だ發育途上にある身心共に未完成なる若き世代が大半(80%)を占めることに気がついた。個々の人間が正常な発達を遂げるには学校を除いて他に有利な機関は余り見当たらない。よりよい生活に対する経験を積むために正しく組織立てられ、管理された体育は全教育計画の他の如何なる面と比べても遙かに大きな可能性

Data on Educational Problems in High Schools

1. * Labour and Learning of the Part-time High School Students.

—With a Part-time High School in a
Coal-mining Area as the Core—

By Shigeru Ishi.

The aim of this study is to make clear the daily life, especially the relation between labour and learning, of the part-time high school students and to submit the data to reconsider them concerning the part-time high school education.

For this purpose the investigation was carried out with the following subjects in view.

1. How do the part-time high school students harmonize their labour and learning?
2. What difference do they have in the achievement as compared with that of the all-time high school students from the difference of the living-condition?

As a result of their surveys we found :

1. Working is inconsistent with learning, in their daily life.
2. They badly need keeping health to continue their learning.
3. Their achievement is inferior to that of the all-time high school students.

For these reasons, if we want to make their learning effectual, we must consider directed-learning for them and make the curriculum on which they can deepen their acquired experience and knowledge.

2. Physical Education and Environment at Part-time High School.

By Sinji Katayama

Part-time high school students, generally speaking, are scarcely favoured with their circumstances of living.

I think, physical education must be able to contribute to those people who are to live on as talented and promising people in the society in the future.

From this point of view, I investigated the most profound problems which have an intimate connection with them.

I believe that these investigations and observations could contribute to the physical education of part-time course as it should be.